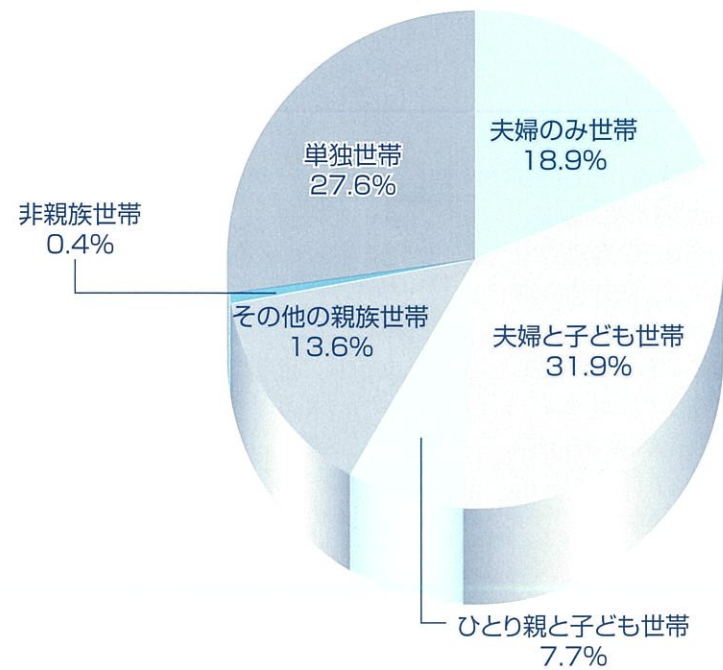


「夫婦と子ども」世帯の割合は約3割



1970年代、1980年代には4割を超えていたモデル世帯といわれる「夫婦と子ども」世帯の割合は、年々減少し、2000年には31.9%になりました。三世代家族を含むその他の親族世帯も同様に減少する一方で、夫婦のみ世帯、単独世帯の増加が著しくなっています。

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2020年には夫婦と子ども世帯の割合は4分の1まで減少すると予想されています。

“家族”の時代

—私たちはどのような家族を望むのか—

発行 西宮市男女共同参画センター ウェーブ
〒663-8204
西宮市高松町4-8 プレラにしのみや4F
TEL.0798-64-9495
FAX.0798-64-9496

発行日 平成16(2004)年3月
制作 (株)オフィス・オルタナティブ
編集協力 河村潤子

“家族”の時代

—私たちはどのような家族を望むのか—



西宮市

家族から連想する言葉

モデル世帯といわれる「夫婦と子ども」世帯は、1970年以降4割弱を保っていましたが、年々減少し、2000年には約3割になりました。

ひとりの女性が生涯に産む子どもの数は1.33人。2001年の婚姻件数は75万5000組で前年を4万5000組下回り、離婚件数は29万2000組と過去最高を更新。3組に1組のカップルが離婚している現状が数字からみえてきます（2002年厚生労働省「人口動態統計」）。

大きく変わろうとしている「家族」について、今、改めて考えてみました。

父の継母への遠慮を子どもながらに感じていた

テレビやコマーシャルで「やさしいお母さん」と当たり前のようにいわれていることに、とても拒否感があります。

病床についていることが多かった母は、私が6歳のときに亡くなりました。幼いころ、母に頼まれたお遣いが上手にできなくて、すさまじく怒られた記憶があります。おそらく、からだが弱くて家事がちゃんとできない引け目が私への怒りにすり替わったのでしょうか。

父親が再婚し、継母からは虐待を受けました。父親は優しくったのですが、継母への遠慮があることを子どもながらに感じていたので、早く家を出たいと思っていました。私が結婚するときには父も亡くなっており、姑から、親がいないということで「どこの馬の骨かわからん」といわれたときの悔しさは、40年以上経った今も忘れられません。

60代 女性 U・Mさん

家族から連想する言葉
仲良し

いきなり大黒柱になった母、トラブルメーカーになった妹

稼ぎ頭の父という存在をなくしたことで、すべてが変わり、家族の在り方や人格形成に大きく影響している。進駐軍で仕事をしていた父は、当時珍しかったシェパードを飼ったり、ジープに乗ったり、目立つ人だった。僕が10歳のときに交通事故で亡くなり、母は専業主婦からいきなり一家の大黒柱にならざるを得なくなった。母は役場に勤めたけれど、長男の僕に期待をかけて、僕だけ連れて大阪の実家に戻りました。将来のある男の子には都会の教育を受けさせて…、教育ママのはしりかな。親戚一同の期待もかかっていたようです。

小さかった妹は田舎のおばあちゃんに預けて。もちろん生活の目途がたつまで。でも、このことがわだかまりとして残り、一緒に暮らすようになって、妹は母を受け容れられず、トラブルメーカーでした。僕はそんな妹にずっと負い目を感じていました。

50代 男性 S・Kさん

家族から連想する言葉
割引

「うちは、フツウの家族じゃないけど…」家族のことを話すとき、いろんな人が最初にいった言葉です。

人の生き方にはいろいろあるように、家族のかたちもいろいろです。それぞれの家族にはそれなりの歴史があって、それなりに悩みや喜びを分かち合っている。一般論では語れない、私の家族の物語…。

僕を立派に育てたと いわれたかったんだと思う

理想の家族は、女らしい母親と存在感のある父親、そして団欒のある家。今の家族は思い描いていた家族に近づけたかなと思っています。

実母は僕を産んですぐに亡くなり、友人だった母に僕を託しました。僕が24歳のときにそのことを聞いたけど、実はうすうす気付いていました。というのも、毎年母の友人が訪ねてきて、僕の様子を聞いていたから。北海道にいる兄弟に伝えていたようです。

母は強烈な人でした。親分肌というか、父の苦境を支えるやり手。虚栄心も強く、僕は「前に出る」とよくいわれました。自分の理想像に近づけて、養子の僕を「立派に育てた」といわれたかったんだと思います。父は陰の薄い、ノーがいえぬ人だった。

一人っ子で育ち、家族で楽しく話をするといいことのない家庭だったけど、僕は甘え上手なので、近所の人にはよく可愛がられました。近所の友だちの家で夕食をよばれて、寝るまで遊ぶ、そんな毎日でした。

60代 男性 宮田良作さん

家族から連想する言葉
拗り所

一緒に行事をする お店の人が家族だった

両親は理・美容院をやっている、仕事場と家一緒だったので、ふたりの働く姿をみて育ちました。母には甘やかされてばかり。若くして亡くなったので優しさの塊のような母という記憶しかありません。父のことは母から「3歳で母と死別、寂しい家庭で育ったかわいそうな人」とずっと聞かされていたせいか、いつも特別で、厳しい存在の人でした。今となっては、話せる父親だったら楽しかったのと思います。

年に何回か、お店で働いている人みんなで、お花見などの行事をしたから、お店の人が「家族」のようでした。

50代 女性 岩崎順子さん

家族から連想する言葉
連帯感

「いいお家の子のように振舞いなさい」といわれていた

父は子ども嫌いだったんだ、と最近になってわかりました。たんに無関心だと思っていたけど。突然怒り出して叩いたりするので、父の機嫌が悪くならないかビクビクして、顔色をみる子どもでした。今は干渉されないから楽だけど。

母は一言でいえば「変わり者」。いわゆる「おかあさん」とは随分ちがうって、友だちと家族の話をするようになって思いました。見栄張りだから、父の職業も嘘を教えられていたし、自分の年齢を子どもにさえないわい。小学生のころから「生徒会長になりなさい」「賢い子でいなさい」ってプレッシャーをかけられていました。「家の外では『いいお家の子』のように振舞いなさい」って、自分のコンプレックスを子どもに押し付けて。母の私への愛情は、愛情というより支配欲です。

30代 女性 1・0さん

家族から連想する言葉
檻

母も父も好きだけど、ふたりは仲がよくない

両親、どちらも好きだけど、母と父は仲が悪くなくて、家ではほとんど話をしなかった。だけど、こんなものだと思っています。

母はまじめな人。でも珍しい食べ物を試してみたりする、変わったところがあります。なんでも最後までやり通す性格で、あんなふうになれたらいいと思う。父は大阪人っぽくておもしろい。よく冗談をいって人を笑わせるし、物知りだから満足している。両親が離婚してから、私は父とおばあちゃんたちと暮らしているけど、母にも会う。仲良しの友だちも母子家庭だし、両親が仲のいい家庭ってみたことがない。

10代 女性 T・Mさん

家族から連想する言葉
愛、親

お店で売ってるきれいなケーキが いいなって思っていた

うちは、友人から「堅苦しくて静かな家」だと思われています。父は食事をしていてもほとんど話をしないから、食卓には会話がな。人が来ると緊張して余計に黙ってしまう。父は仕事中心で、まじめで、無口で、堅苦しい。趣味は書道と弓道というように古臭い。子どものころ、「ドリフ」のテレビ番組をみたり、マンガを読んだりしていると怒られました。

母はしっかり者でよく働く。家で洋服の仕立てや織物をしています。母は何でもつくれるけど、誕生日会のケーキはお店で売っているようにきれいじゃないから嫌だなあと思っていました。学校に持っていく手提げ袋も手づくり、既製品が欲しかった。

もっと、ラフで堅苦しくない家庭ならよかったのに、って思っています。

30代 男性 T・Sさん

家族から連想する言葉
小さい社会

つくられた 家族イメージにとらわれ、 親密になれない家族

お互いに理想像を押しつけあっている

家族はもっとも親密な人間関係の小集団と考えられますが、カウンセリングの現場からみていると、本当に家族は親密なのだろうか疑問に感じることが多いのです。親密というよりも、境界線が曖昧で、お互いに勝手な理想像を押しつけ合っているような気がします。個として尊重し合えず、「家族の役割」を演じている。親の期待する子ども役割を強いられている子どもたちは、本当の自分を表現することができず窒息しそうな状態です。

親密さは、家族なら当たり前というもので、自然にできるものでもなく、生活をともにする中で生じるさまざまな感情の共感を積み重ねて、つくっていくものです。共感、相手の気持ちを尊重する対等な関係がないと生まれません。ところが親子関係となると、親の側の意識には、子どもは親に従うのが当たり前という考えも根強く、子どもと対等に親密な関係をつくろうとするよりも、親役割を重視するあまり管理者の立場になりがちです。

感情表現ができない子どもたち

今の子どもたちは表面的な会話はするけれども、感情をうまく表現することができません。例えば、自分がいやだと感じていることを、そのとき「いや」と言葉で伝えられなくて、心の中にためていく。やがて何かの引き金でいきなり、「死ぬ」「失せろ」と非常に過激な言い方をしてしまう。実際にはそこに至るまでのいろんな傷つきがあります。

子どもが転んで泣いているときに、親や周りの大人から「痛かったね」という言葉をかけてもらうことで、子どもは「痛い」という表現を習得していきます。ところが現実には、ぐずぐず泣いていると、気持ちを無視され、早く〇〇しなさい、と次の行動を促されます。そのようなことが続くと「痛い」という感情と、

「痛い」という言葉がつかなくなると、自分の感情を言葉にして相手に伝えることができなくなるのです。とくに、辛い、しんどい、いやだ、したくないといった否定の感情表現は、親の期待を担う「良い子」役割を演じている子どもほど、押さえつけてしまうのです。感情を表現するというのは、とても文化的な作業です。共感する、しないという以前に、感情を伝えることを学ぶ機会が奪われているのが現状です。

実はこの問題は根が深く、今の子どもたちの親世代が、既に感情表現をもたない子どもとして育てているので、親自身が感情を伝える術をもっていないのです。

役割が優先され、心の問題を封印してきた大人たち

今の30~40歳世代が育ってきた時代は、ちょうど経済の高度成長期で、彼らの親たちは、豊かさを手にするというひとつの目標に向かっていました。

豊かさの象徴として、両親と子ども2~3人の核家族の「幸せ家族モデル」がつけられ、みんなが同じ家族像を求めることとなります。家族はそれぞれの役割を担うことが前提でした。女性は常に優しく、かいかいしく家族、家庭生活の面倒をみる母役割、男性は家族を養う大黒柱としての強く頼もしい父役割、子どもには親の望む子ども役割をまっとうすることが期待されていました。しかし、ときには期待を裏切るような感情が生じることもあります。ところがこの世代は、役割が優先されるあまり、一人ひとりの気持ちや感情を切り捨ててきたのです。

日本社会が心の問題を取り上げたのは阪神淡路大震災後です。ヨーロッパでは第2次大戦以降、戦争によって傷ついた人々のこころの問題が重要視され、トラウマの心理学を発達させてきました。日本は戦後、寂しい、辛いという一人ひとりの感情は社会全体で封じ、とにかく経済優先でやってきて、今ようやく個人のこころに関心をもつ時代に入ったのです。



村本 邦子さん

女性ライフサイクル研究所所長
臨床心理士
心理学女性学博士
立命館大学応用人間科学研究科特別任用教授

【著書】『しあわせ家族という嘘』創元社、『子ども虐待の防止力を育てる』京都法政出版、『今からでもできる人格の土台をつくる子育て』三学出版(共著)、『子どもの叱り方』三学出版(共著)他

個と親密性が共存する関係

家族の中でお互いの細やかな感情を大事にしていけば、役割は演じきれものではないことがわかります。したくないこと、できないことに対して「だって…」と自分の気持ちを伝える雰囲気があるかどうかです。相手の言葉に耳を傾けられるかどうか。役割ではなく、相手の立場になって感情を受け容れていくことが家族の中の「個」を尊重しつつ、親密な関係をつくっていくこととなります。

辛い、悔しい、いやだ、ノー、という感情は決してマイナスの感情ではなく、情緒豊かな人間性を育てるために不可欠なものです。つくられた家族イメージにとらわれると、家族のそうした感情の行き場を奪ってしまいます。「幸せ家族」は決して一つのかたちではなく、誰かから与えられるものでもありません。お互いの感情を言葉で伝え合うことができ、個と親密性が共存する関係を模索する家族の数だけあるものです。

子どもは、さまざまな人間関係に 癒されながら「発達」する

稲垣 由子さん

甲南女子大学 人間科学部教授

小児科医として長年子どもたちを診てきましたが、母親にこうした方がいいという話をしても、伝わりにくく状況が改善されないケースにどのように伝えればよいのか悩んだことがありました。その背景には、家族の問題を抱えている場合が多く、とくに虐待やDV家庭の場合は小児医療の現場だけでは解決できないと感じるようになりました。

発達行動小児科学からみると、からだの量が大きくなることを「成長」といい、からだのそれぞれの機能が大人の機能になっていくことを「発達」といいます。人間は成長・発達し、そして退化していく。その成長・発達している段階を「子ども」と定義します。

子どもは、両親の遺伝子を受け継いでいる生物学的要因と、養育者と子どもの関係や家庭環境、社会的環境など「私」を取り巻くすべての外界の環境的要因の影響を受けて発達していきます。外界の刺激を五感によって脳に入力し、脳に記憶されている体験と照らし合わせ思考します。思考と同時に筋肉をつかって、書いたり言葉を発したりして出力し外界に対して働きかけます。このように外界が子どもに働きかけると同時に、子どもが外界に働きかけ相互作用しながら同時進行し連綿として、発達を促すのです。DVと虐待は子どもにとって同じであるといわれるのは、子どもに働きかける外界が暴力の環境であるという意味で同じなのです。

家族の意味合いには二通りがあります。そのひとつは母親と父親にとっての家族creative family(クリエイティブ ファミリー)であり、自らの意思でつくっていく家族形態です。もうひとつは子どもにとっての家族形態でfixed family(フィクスト ファミリー)といい、そこに生まれてきて育ってきた家族形態です。親と子どもでは家族の意味があきらかにちがいます。親は、子どもの安全な成長と発達を保障する義務があるのです。

親に誉められるより怒られた記憶の方が多いという人はたくさんいます。怒られてもしかたなかったなあと思えるのは、その体験を乗り越えられたということです。親からの虐待まがいの体験を乗り越えることができたのは、「発達」したからです。虐待を親から受けたという体験は消すことはできませんが、親以外の、例えば学校の先生など「自分を支えてくれる人がいる」ことを実感しながら人間関係の安全基地を育てていけると、親との人間関係を乗り越えられることが可能となるのです。

日本型家族政策がつくってきた家族



下夷 美幸さん

法政大学社会学部助教授

【著書】『女性と社会保障』東京大学出版会、『現代家族と社会保障』東京大学出版会、『親と子—交錯するライフコース—』ミネルヴァ書房（いずれも共著）

戦後、荒廃した社会を早急にたて直していくための経済政策に連動して、家族政策はすすめられてきた。高度経済成長期には、効率よく生産性をあげるために、性分業型の核家族がモデルとされ、日本の経済力を押し上げる役割を果たしてきた。

家族のかたちが多様化する時代の中で、経済至上主義を前提としたこれまでの制度が軋みはじめている。

理想でも、問題があるかたちでもないモデル家族

子どもが両親に育てられることを家庭生活の基本パターンと考え、それを家族のかたちとすること自体は、社会にとっても、親にとっても、子どもにとってもプラスでもマイナスでもありません。つまり、それが家族の理想のかたちでもなく、家族の形態として何らかの問題をもっているというわけでもないという意味です。全体的にみると、家族のかたちはその時代に合ったものを志向して常に動いています。

時代によって人の生き方が変わっていくように、家族のかたちは、社会構造や経済状況、政治状況によって変わってきました。少し前までは、家族といえば、両親と子どもからなる核家族が

典型的でしたが、未婚・非婚化や離婚の増加などにより、現在では両親と子どもからなる核家族だけではない、さまざまな家族が登場してきています。

政策とは、国家が資源の再分配を行うこと

人が生きていく上で必要な資源には、衣・食・住などの物質的なものと、愛情などの精神的なものがあります。私たちはこれらの資源を「市場」や「家族」を通じて調達しています。もうひとつ、資源の調達先として欠かせないのが「国家」です。国家は、税金や社会保険という仕組みを通じて、交通網や上下水道などのライフラインを整備し、子どもたちが教育を受けられる権利を確保し、病気や高齢期に備えて医療や年金を制度化するなど、人々に資源を再分配します。

家族政策はさまざまに定義されますが、福祉国家による再分配政策のうち家族にかかわる政策を、ひとつの家族政策とみることができます。そうすると、家族政策は、国が家族モデルをつくり、その実現に向けて資源の再分配を行うこと、と言い換えられます。

家族のかたちは、政策にリードされて変わる

これまでの家族政策の流れをみると、基盤となっている家族モデルは、その時代の政治や経済によって変化しています。

例えば、経済の高度成長期には、老親の生活を心配することなく、企業の生産活動に従事できる労働者核家族がモデルとされ、高齢期の年金制度が整備されました。また、終戦直後の保育政策は、女性の労働と育児の支援を理念としていま

したが、保育所が不足するようになると、母親による家庭での育児がモデルとされ、それができない家庭に対する福祉政策へと変化しました。本来、家族の在り方は個人やカップルが自由に決定することですが、実際の家族のかたちはこのような政策にリードされて動いてきました。

現在、人々の生き方が多様になり、家族モデルと家族の実態がもっともそぐわなくなった時代といえます。

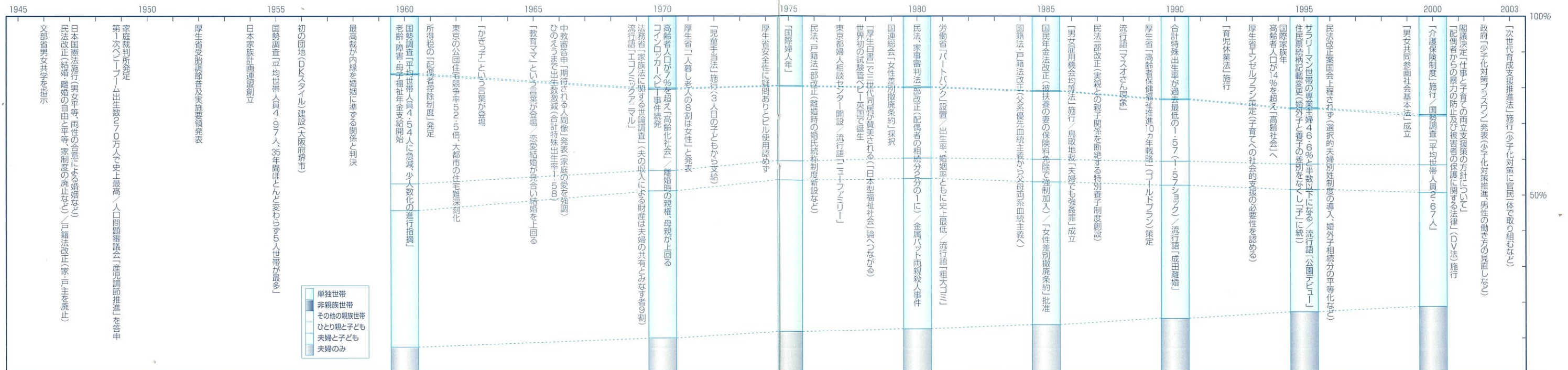
私的な事柄を政治・経済の問題と同等に語り合う

日本社会では、家族のような私的な事柄は、政治や経済のような公的な事柄より、下に位置づけられています。でも、こうした公私の上下関係が続けば、家族の問題に対する社会の対応は後回しにされ、多くの人にとって生きにくい社会が続いてしまいます。

例えば、夫が妻を扶養することを前提にした政策は、女性の人としての価値や生きる力をそぎ、男性を労働力として極限に追い込んでいます。こうした政策を変えていくには、家族の問題を私的領域に閉じ込めるのではなく、公的な場でオープンに議論していくことです。子育てがきつい、夫婦の在り方はこれでいいのかといった問題を、政治や経済の問題と同等の時間と労力をかけて、さまざまなレベルの公共の場で語り合うことによって、政策は改善されていきます。

いろいろなかたちの家族が生きやすい社会の実現は、私たちがどんな家族を望み、どんな家族政策を望むのか、そして個人と家族と国家の新しい関係をどのように考えていけるのか、にかかっています。

世帯の変化と社会のできごと



資料：国勢調査、「家族データブック」有斐閣2000年